

## 第四章 イスラエルにおける選挙制度と政党

臼杵 陽

### 1. はじめに

本論においては、イスラエルにおいて1992年に首相公選制が導入されたものの、わずか三回実施されただけで何故短期間で廃止されたかを、イスラエル政党政治に孕む諸問題と関連させながら再検討していくことを目的としている。首相公選で選出された歴代首相はネタニヤフ、バラク、そしてシャロンの三人であり、シャロン首相は現役である。しかし、首相公選制はすでにその役割を終えた。というのも、首相公選において選出されたシャロン首相自身がこの制度に終止符を打ったからである。シャロン後のイスラエル政治は再び従来の議会内閣制に基づいて首相が選出されることになる。つまり、議会第一党の党首が首相として内閣を形成するのである。やはり首相公選制に決定的な欠陥があったからこそ、廃止の運命を辿ったのである。

1995年11月に暗殺されたイツハク・ラビン首相の後継となったシモン・ペレス首相が議会内閣制の最後の首相であった。首相公選制は1996年以降の中東和平プロセスにおけるイスラエル政治のあり方を決めてきた。この首相公選のあり方を問うことはイスラエル政党政治の問題点を改めて振り返ることでもある。本論ではまず、クネセト（議会）選挙の制度を振り返り、次に首相公選の問題を宗教政党に焦点を当てて検討する。

### 2. イスラエルにおける選挙制度

#### (1) クネセト（議会）とその選挙

イスラエルにおける最高立法機関である国会（通称、クネセトKnesset）は、一院制であり、議員定数120名である。議員の任期は4年で、国会は立法機能のほか国会審議を行ない、また外交・国防、財務、経済、司法などの10種類に及ぶ国会諸常任委員会を通して行政府の仕事を監督することである。議員の選挙権は満18歳以上、被選挙権は満21歳以上の国民に与えられる。選挙は一選挙区の全国選挙で、比例代表制がとられている。

クネセトは1949年に発足した第1期議会以来、現在の15期議会に至っている。第1表に示すとおり、イスラエル建国以来、クネセトは、左派政党である現在の労働党につながるマパイ（エレッツ・イスラエル労働党）右派政党である現在のリクードにつながるヘルート、そしてアグダト・イスラエルやマフダル（国家宗教党）などの宗教政党、そしてその他（ロシア系移民政党、アラブ政党、共産党系、極右政党など）から構成される。

建国から1977年の第7期議会まではマパイ(エレッツ・イスラエル労働党)とその後身であるイスラエル労働党が議会第一党として与党の連立内閣となった。1977年の第8期議会以降1992年までリクードが第一党として与党の連立内閣を形成した。もちろん、その間、リクードと労働党とが連立を組む挙国一致内閣もあった。1991年の湾岸戦争以降、イスラエルの政党政治は和平をめくり流動化することになった。

1992年に首相公選制が導入されるまでは、行政府(政府)の長(首相)は議院内閣制によって選出されていた。クネセト第一党となった政党の党首を首班とする内閣がクネセトの過半数以上の賛成をえて組閣された。

ところが、首相公選制の導入に代って、首相は選挙法(クネセトおよび首相)にしたがって、直接、平等かつ秘密において行なわれる総選挙で選出されることになった。また、閣僚は首相によって指名され、クネセトの承認が必要とされた。クネセトが政府構成(組閣)に関する首相の提案を拒否した場合、首相への不信任とみなされ、第19条「(a)クネセトはその成員の多数をもって首相への不信任を表明することができる。(b)首相への不信任の表明は職務期間の終了前にクネセトが解散を決定したものとみなされる」によって、総選挙が実施される。と同時に、選挙がクネセトのために実施された場合には必ず首相のための選挙も同時に決定されるものの、首相選挙がクネセト選挙とは個別に行なわれることも排除していない。実際、2001年に実施された最後の首相公選はクネセト選挙とは別個に行なわれた。

首相公選の選挙権はクネセトにおいて選挙権を有すものである。首相および閣僚の任期はクネセト選出議員との期間と同じである。首相立候補資格者は、クネセト候補の資格を有し、少なくとも候補届出の日に30歳であること、首相選挙がクネセト選挙と同日に行なわれた場合、首相候補はクネセト候補リストのトップでなければならない、補欠選挙が実施された場合、首相はクネセト議員でなければならない、という条件が付されている。また、首相候補を推薦できるのは、クネセト候補リストを提出した最低10名のクネセト議員の党派、複数のクネセト候補リストを提出した最低10名の複数のクネセト議員の党派、参政権をもつ5万人の人々、である。また、補欠選挙の場合、候補者はクネセトの一つの党派あるいは二つの党派によって推薦され、その一つの党派あるいは複数の党派の総員は最低10名の議員あるいは5万人の参政権をもつものによって推薦されなければならない、と細かく規定されている。

## (2) 二大政党と宗教政党 連立内閣形成のキャスティングヴォートとしての宗教政党

イスラエル政党政治において宗教政党は難しい政局でイスラエル政治の方向性を決定する、きわめて重要な政治的な役割を果たしてきた。というのも、立法府たるクネセトにおいて議会第一党が絶対多数を占めることができず、単独政党では内閣を組閣できなかったという長いイスラエル歴代内閣の歴史を背負っているからである。

イスラエル歴代内閣史を振り返ると、イスラエル建国以来、最初の約30年間は労働党、次の15年間はリクードが議会第一党の連立与党になった。にもかかわらず、宗教政党が必ず連立内閣の一角を占めてきた。すなわち、1948年のイスラエル建国から1977年までのイスラエル労働党連立政権時代、そして1977年から1992年までのリクード連立政権時代（挙国一致内閣も含む）には国家宗教党が、1992年から1996年のラビン首相とペレス首相の労働党政権時代から現在のシャロン内閣までのシャス党がその位置にあった。

1999年までクネセト選挙は15回実施されているが、宗教政党所属の平均議員数は120人の議員定数のうち17.46人（約14.5%）である。しかし、首相公選制を導入する前と後とは歴然とした差が出てくる。すなわち、1996年の第14期クネセト選挙で首相公選制が導入する前では宗教政党所属の議員は16.3人（約13.6%）にすぎないが、導入後は25人（約20%）に増加する。その内訳はネタニヤーフ政権時代には23人（約19.1%）であるが、バラク政権およびシャロン政権では27人（22.5%）にまで上昇するのである。イスラエル議会が比例代表制であることを考えると、国民の5人に1人は宗教政党に投票したことになるのである。また、このような宗教政党の躍進はイスラエル社会におけるダティーム（Datim:宗教的な人々）あるいはハレディーム（超正統派の人々）の増加を反映したものだともいえる。つまり、テシュヴァ（Teshuva:回心）を行なってヒロニーム（Hilonim:世俗的な人々）からダティームとして信仰生活に入る人が増えつつあるとも考えられるのである。

そもそも、イスラエル議会での小党乱立はイスラエル社会における複雑な政治的、社会的な利害対立を反映したものである。クネセトの成立史を考えただけでも、クネセト内の利害調整がいかに困難であったかは容易に知ることができる。イシューヴ（イスラエル建国前のパレスチナにおけるユダヤ人社会）においてシオニスト諸派、非シオニストあるいは反シオニスト諸派はそれぞれの政党・政治勢力の政治社会組織を軸にお互いに独立した状態にあった。そのような諸派の分立した状態がクネセトにおける議席にも反映されていたと同時に、イシューヴおよびイスラエル国家において国民統合のための「市民宗教」を作り上げるのがいかに困難だったかがわかる。

もちろん、小党乱立は選挙制度の部分的な変革で一定程度まで制御できる。すなわち、

小党乱立をもたらす選挙制度の問題として最低得票率をあげることができるからである。イスラエル全国が一区の比例代表制であり、政党を基礎とする選挙リストがクネセトで議席を獲得するための最低得票率は当初1%であったのが、1992年の選挙で1.5%にまで引き上げられた。そのため、小党乱立の傾向は若干減ったとはいいながら、1999年に選出された第15期クネセトには依然として15の議会内会派(選挙リスト)がある。

ところで、イデオロギー的に概観すると、概して世俗的なユダヤ・ナショナリズムとしてのシオニスト諸政党との関係では徹頭徹尾反シオニズムを掲げてき超正統派ユダヤ教徒の宗教勢力であるアグダト・イスラエル(Agdat Yisrael)はシオニズムを承認しなかった。しかし、ダヴィド・ベングリオン初代イスラエル首相(1886 - 1973)は建国直前、宗教勢力による新国家での宗教的現状維持の要求を受け入れざるをえなかった。この宗教的現状維持こそがイスラエルにおける世俗シオニスト政党と宗教政党との関係を規定することになった。そのある種の「紳士協定」の内容は、安息日として、ユダヤ人の休日としてのシャバトの承認と公共空間におけるその遵守、コシェール(ユダヤ教に則った食事規則)に関して、公共機関および政府関係機関におけるカシュルート(コシェールの名詞)の遵守、出生、結婚や離婚などの婚姻、相続、埋葬などに関連するユダヤ教徒一人ひとりの生活に関わる諸問題をハラハー(ユダヤ宗教法)に従ってラビ法廷の管轄とする、教育制度に関しては超正統派ユダヤ教徒あるいは正統派ユダヤ教徒などの宗教組織による学校運営と国家による不干涉、宗教諸コミュニティに対する公的財政援助、などであった。

以上のような宗教的現状維持に関する合意は、世俗的なシオニストからはベングリオン首相による一世一代の失政とみなされているが、とりわけこの「紳士協定」は1977年以降、つまり、リクード政権の成立以降、きわめて深刻な問題としてたち現れてきた。というのも、ユダヤ教に深く関わる法律、つまり、過去にシナゴークなどの宗教施設があったとされる場所の発掘調査に関わる考古学遺跡法、死後の遺体を解剖するための検死法、墮胎を認めないユダヤ教に深く関わる中絶法、そして「誰がユダヤ人」問題と深く関わっている基本法の一つ「帰還法」などの法律の制定あるいはその改定において議論が沸騰したからである。

### 3. 首相公選制の導入とその廃止

#### (1) 首相公選制導入とその実施

以上のように、宗教政党が連立内閣の成立や崩壊のときのキャストリングヴォートを握ってきたことはイスラエル政党政治におけるもっとも深刻な問題として提起されること

になった。このような事実上の多党制下にあるイスラエルの政局が宗教政党によって規定されるようなその政党政治においてはきわめて不健全であるという考え方が、相対的ではあるがかりうじて二大政党制を保っている、あるいは保とうとしている労働党およびリクード党から惹起されるのも何ら不思議なことでない。すなわち、イスラエルにおける議会政治の発展のためには理念としても二大政党制を確立する必要があり、労働党とリクードというシオニズムを代表する左派政党（労働シオニズムあるいは社会主義シオニズム）と右派政党（修正主義シオニズム）による政権交代が、アメリカにおける共和党と民主党のようにスムーズに行なわれる政治状況が理想的な政党政治として想定されたのである。1987年、ウリエル・リヒマン・テルアヴィヴ大学教授が「イスラエル憲法」を提案したが、この提案に対してクネセト議員のあいだに支持がひろがった。

二大政党制を理想とするような現実的な状況が1988年の第12期クネセトで生まれた。すなわち、リクードが40議席、労働党（当時はマアラハ）が39議席という僅差で、この二党で議会議席数の3分の2を占めるといふ均衡状況が生まれた。それが故に同時に、拮抗する二大政党の間で行なわれる連立内閣形成の駆け引きにおいて、1980年代終りにはシヤス党6議席、国家宗教党5議席、アグダト5議席、そしてデゲル・ハ・トーラー1議席という議席配分の宗教政党が政治的に果たす役割が相対的に一層大きくなったのであった。したがって、労働党とリクードからより安定的な二大政党制の実現のために提起された改革案が国民が直接首相を選出する首相公選制であった。実際、前述のように1980年代末から首相公選制に関する議論が始まり、1992年にはクネセトで首相公選制が可決され、1996年の総選挙で実施されることになったのである。その結果、1992年に「基本法 首相公選制（直接選挙法）」が第13期クネセトで決議された。実際に首相公選制が実施されるのは、1996年第14期クネセト選挙と同時であり、この選挙でネタニヤーフ首相の新誕生が誕生した。

首相公選は改訂された「基本法政府」における「第3条 首相は選挙法（クネセトおよび首相）に従って直接、平等、秘密において行なわれる総選挙で選出されることによって職務を行なう」および「第4条 選挙がクネセトのために実施された場合には必ず首相のための選挙も同時に決定される。ただし、選挙実施訴訟にしたがって新たな選挙が実施された場合は除く」に基づいて行なわれた。

## （2）首相公選における選挙と首相公選制の廃止

最初に首相公選とクネセト選挙が同時に行なわれた1996年選挙はイスラエル選挙史上の画期的な出来事であった。ネタニヤーフがイスラエル政党史上初めてイスラエル建国後に

生まれた首相となった。そのような若返りは別として、選挙制度とのかかわりでその特徴を述べると次のようになる。すなわち、言うまでもなく、首相公選とクネセト選挙が同時に行なわれたことであり、1993年のオスロ合意締結後、初めて実施された選挙であったためにオスロ合意の是非を問う政治的な意味合いももち、1995年のラビン首相暗殺事件後初めての選挙であるために、いっそう労働党とリクードとの対決姿勢が鮮明となったことであり、それがゆえに、史上最高の投票率を記録し、当選したリクードのネタニヤーフ候補と落選した労働党のペレス候補の得票数がわずかであり、僅差で首相が当選したことは中東和平をめぐる国論が二分していることを如実に示した、などをあげることができる。

ネタニヤーフ首相は就任後、オスロ合意に基づく和平プロセスを積極的に推進する意思をもっていないことを内外に示すことになった。すなわち、就任直後にエルサレムに大規模なユダヤ人入植地建設を許可し、さらにアラファトPLO議長とは直接協議をする様子をまったく示さなかった。

ところで、首相公選制廃止に至る最大の要因は、首相公選制導入によって達成できると想定された二大政党制の方向性にクネセト（議会）が向かうどころか、クネセトでは労働党、リクードの二大政党が極端に議席を減らし、当初の二大政党制への一里塚と踏んでいた予想に完全に反して、かつての多党制以上の小党乱立を招いたことにあった。クネセトにおける小党乱立は、有権者が行政府たる首相選挙と立法府たるクネセト選挙ではまったく異なった投票行動を取った結果であった。すなわち、首相公選制導入の最大の政治的な目的は、宗教政党をはじめとする弱小政党がキャスティングヴォートを握ることで政治的影響力を行使するといった政治状況の現出をあらかじめ排除するためであったが、労働党とリクードという大政党が歩調を合わせたにもかかわらず、その予想に反してクネセトにおける二大政党の勢力は逆に極端に衰退してしまったために、二大政党制の実現という目的は実際には達成されなかったばかりではなく、二大政党は議会での議席を減らしたために議会運営において、とりわけ、組閣工作できわめて難しい立場にたたされることになったことであった。

そもそも、首相公選制導入前とほとんど変わらない状況に立ち至ってしまったのは、選挙制度改革ばかりに忙殺され、立法府と行政府の権力関係を従来のまま手つかずの状態のまま新たな制度を実施してしまったからでもある。つまり、首相公選制の導入と同時に、首相の権限をかぎりなく大領領に近づけることによって、首相が立法府から比較的自由的な立場より行政を行なうことができるようにすべきであった。しかし、議会の抵抗が強く、従来

のまま内閣不信任案は議会の絶対多数で可決されるという議会内閣制の尻尾を残したままであった。そのために、首相は必然的に議会決議に束縛されることになり、十分な政治的なイニシアティブをとれないままに議会に翻弄されることになった。

立法府による行政府の政治的な翻弄という意味で、選挙制度改革で一人勝ちしたのは宗教政党のシャス（スファラディー・トーラー護持）党であった。シャス党はエスニック政党と宗教政党の二つの政治的性格を持ち合わせているという点でイスラエル政党史上きわめてユニークである。というのも、シャスは議会選挙におけるリクード支持票の多くをこの新選挙制度導入で獲得することになったからである。少々詳しくなるが、選挙制度を考える上で極めて興味深いので、シャス党の事例を考えてみたい。

というのも、シャス党の国会での躍進はシャス党の下部社会組織の拡大に呼応したものであり、むしろ首相と議会との投票が分離した方が単一イシュー政党としては有利になったからであった。シャス党は、エル・ハ・マヤーン（El ha-Maayan: ヘブライ語で「源泉へ」）という教育機関の全国ネットワークを傘下に置いていた。そのネットワークは主に政府からの補助金で運営されていた。ネットワークは敬虔なユダヤ教徒の培ってきた伝統と価値をいっそう広め、宗教サービスを充実し、宗教生活の質を向上させ、宗教的必要物を提供することを目的とした。実際、一説によれば、3万箇所から4万箇所もの幼稚園や小学校を運営しているという。おまけに学費も安く、また授業時間も公立学校よりも長く、給食、スクールバス、特別の宗教教育などのサービスにおいて充実している。また宗教サービスの面でもパール・ミツヴァ（ユダヤ教の成人式）、成人学習、女性への支援、青年団活動、新移民プログラム、イエシヴァー学生への奨学金給付制度などを提供している。さらに、シャス党の下部社会組織の指導者層は同時にソーシャルワーカーの代替としての役割、家族内の問題の調停人、さらには失業者の就職援助まで行っている。

シャス党の選挙公約としては、ユダヤ人の社会と国家へのハラハー（ユダヤ教法）の貫徹を主張するハレディーム政党として宗教と国家の分離には反対する立場から、超正統派ユダヤ教の学校制度の維持、あらゆるかたちのエルサレム分割の反対、イエシヴァー神学生の兵役義務の免除、シャバト（安息日）の交通機関の運行停止、妊娠中絶の禁止、世俗的教育機関への超正統派ユダヤ教的な運用の方法の導入、帰還法の改訂などを要求している。しかし、中東和平問題に関しては概して柔軟な姿勢を維持しており、生命が救われるのであれば占領地は放棄すべきだというシャス党の精神的な指導者であるラビ・ヨセフの主張を公約にしている。占領地の放棄の理由として、メシアが到来するときにはエレッツ・イスラエルは自動的にその正当な所持者のもとに帰すると信じているからである。このよ

うな宗教的確信に基づいてオスロ合意における「土地と平和の交換」の原則にも賛成の立場をとっている。

ところが、飛ぶ鳥の勢いのシャス党にとっての正念場はシャス党の党首アリエ・デリが汚職事件で起訴されたことであった。それも禁固3年の実刑判決を受けて、シャス党首も退いて、収監された。そして議員も辞職した。もちろん、この汚職問題はたんに公金横領事件あるいは収賄事件というよりも、シャス党の社会福祉のためのネットワークの機能と密接にかかわっている。デリは公金を横領して自宅の費用に当てるなど私腹を肥やしたと非難されている。にもかかわらず、シャス党支持者には、デリ内相が汚職事件によって起訴され、有罪判決を受けたのは、ミズラヒームに対するアシュケナジームの根深い差別故だと信じている人々が少なからず存在するという事実である。しかし、シャス党はむしろこのような政治的危機ともいえる困難のなかで挙党一致体制を確立して、よりいっそう集票力を強めているのである。

このようにクネセト選挙でかえって宗教政党が議席を増やしてしまうことは首相公選前とまったく変わらない状況だといえるし、またイスラエル社会自体の宗教復興という大きな流れを受けたものだけにその場限りの選挙改革では如何ともしがたいのが現実なのである。つまり、行政府と立法府の権力関係を従来通りに維持したまま首相公選制を導入したことはイスラエル政党政治の実験としては見事な失敗と結論づけられたのである。つまり、首相公選は3回実施しただけで5年という短期間で廃止に追い込まれたのである。結局、首相公選制がもたらしたのは、行政権の弱体化と不安定化、二大政党の凋落と宗教政党の躍進、小党分立と連立内閣形成の困難、という古くて新しい政治状況だったわけである。

#### 4．おわりに

首相公選制とクネセトの同時選挙によって成立した内閣は、1996年に成立したリクード党のビンヤミン・ネタニヤーフ政権、1999年に政権についた労働党のエフード・バラク首相という二内閣にすぎなかった。前述のように、2001年2月に行なわれた選挙ではクネセト選挙は実施されずに単独で行なわれた最初で最後の首相公選であり、その首相選挙ではリクード党のアリエル・シャロン首相が選ばれた。すなわち、首相公選制は実際には三度しか実施されないまま、シャロン首相選出後のクネセトにおいて首相公選制廃止が2001年3月7日にクネセトで決議されたのであった。

(第1表) 歴代クネセトにおける選挙リスト(政党)議席配分

- 第1期クネセト(1949) マパイ46 マパム19 ヘルート14 統一宗教戦線16 一般シオニスト5 革新党5 スファラディーム・リスト4 マキ(共産党)4 その他5
- 第2期クネセト(1951) マパイ45 一般シオニスト20 マパム15 ヘルート8 ポエール・ミズラヒー8 アグダト・イスラエル3 ポエール・アグダト・イスラエル2 ミズラヒー2 マキ5 マイノリティ・リスト5 スファラディーム・リスト2 イエメン系リスト 1
- 第3期(1955) マパイ40 ヘルート15 一般シオニスト13 統一宗教戦線11 労働統一・ポアレイ・ツヨーン連合10 マパム9 文化的宗教戦線6 マキ6 革新党5 マイノリティ・リスト5
- 第4期(1959) マパイ47 ヘルート17 マフダル(国家宗教党)12 マパム9 一般シオニスト8 労働統一・ポアレイ・ツヨーン連合7 トーラー宗教戦線6 革新党6 マイノリティ・リスト5 マキ3
- 第5期(1961) マパイ42 ヘルート17 リベラル党17 マフダル12 マパム9 労働統一・ポアレイ・ツヨーン連合8 マキ5 AY4 ポエールAY2 マイノリティ・リスト4
- 第6期(1965) マアラハ(労働党) 45 ガハル26 マフダル11 ラフィ10 マパム8 独立リベラル5 アグダト・イスラエル4 マイノリティ・リスト4 ラカハ(新イスラエル共産党リスト)3 ポアレイAY2 ハ・オーラム・ハ・ゼ1 マキ1
- 第7期(1969) マアラハ56 ガハル26 マフダル 12 AY4 独立リベラル4 国家リスト4 マイノリティ・リスト4 ラカハ3 ポアレイAY2 ハ・オーラム・ハ・ゼ2 自由セントラル2 マキ1
- 第8期(1973) マアラハ51 リクード39 マフダル 10 トーラー宗教戦線5 独立リベラル4 ラカハ4 ラッツ3 マイノリティ・リスト3 モケード1
- 第9期(1977) リクード43 マアラハ32 ダッシュ15 マフダル12 AY4 ポエールAY1 シュロモーツヨーン2 シェリー2 ポルト・シャロン1 マイノリティ・リスト1 ラッツ1 独立リベラル1
- 第10期(1981) リクード48 マアラハ47 マフダル6 AY4 ハダシュ4 テヒヤ3 タミ3 タラム2 シヌイ2 ラッツ1
- 第11期(1984) マアラハ44 リクード41 テヒヤ=ツォメト5 マフダル4 AY2 シャス4 ハダシュ4 シヌイ3 ラッツ3 エハド3 平和推進リスト2 モラ

シャー2 タミ1 カハ1 オメーツ1

第12期(1988)リクード40 マアラハ39 シャス6 マフダル5 AY5 デゲル・ハ・トローラー1 テヒヤ3 ツォメト2 モレデト2

第13期(1992)労働党44 リクード32 マフダル6 シャス6 モレデト3

第14期(1996)労働党34 リクード32 シャス10 マフダル9 ユダヤ統一党4 モレデト2

第15期クネセト(イスラエル国会)の選挙リスト別の議席・得票数・得票率(ただし、得票率1.5%以下の選挙リストは国会議席を確保できないので除外した)

選挙リスト	議席	得票数	得票率
一つのイスラエル(労働党系)	26	670,484	20.2%
リクード	19	468,103	14.1%
シャス党	17	430,676	13%
メレツ(民主的イスラエル)	10	253,525	7.6%
イスラエル・バ・アヤ(ロシア系移民党)	6	171,705	5.1%
シヌイ(世俗主義)	6	167,748	5%
中央党	6	165,622	5%
マフダル(国家宗教党)	5	140,307	4.2%
統一トローラー・ダヤ教党	5	125,741	3.7%
統一アラブ党	5	114,810	3.4%
国民統一党	4	100,181	3%
イスラエル共産党系(ハダシュ)	3	87,022	2.6%
我が家イスラエル	4	86,153	2.6%
バ'ラト(国民民主同盟:アパ'')	2	66,103	1.9%
一つの国民	2	64,143	1.9%

(出展) <http://www.knesset.gov.il/asp/election/eresults.asp>

イスラエルにおける政党概要（ただし、クネセトに議席を有する政党に限る）

## 1. 一つのイスラエル

イスラエル労働党系。シオニズム史のなかでは労働シオニズムあるいは社会主義シオニズムを信奉する政党であった。初代イスラエル首相となったダヴィド・ベングリオン以来、1977年まで与党の座にあったが、1977年に初めて野党に転落した。1992年にイツハク・ラビンの下で再び与党に返り咲いたものの、ラビン暗殺で後任の首相となったシモン・ペレスが1996年の初めての首相公選でリクードのベンヤミン・ネタニヤーフに敗れた。しかし、1999年の首相公選でエフード・バラク労働党党首が現職のネタニヤーフ候補を僅差で破り、再び与党となった。この際、イスラエル労働党は選挙リストとしてはユダヤ教宗勢などを取り込みながら、「一つのイスラエル(Yisra'el Ehad)」を結成して今日に至っている。

## 2. リクード：本文参照

## 3. シャス

シャスは1984年の第11期クネセト選挙前にアグダト・イスラエルから分離・独立して結成された。シャスの精神的指導者はラビ・オヴァディア・ヨセフ(Ovadia Yosef)である。ラビ・ヨセフは1920年、イラクのバグダードに生まれ、24年パレスチナに移民した。エルサレムのポラート・ヨセフ・スファラディー・イエシヴァーで教育を受け、以後、イスラエル建国までカイロのユダヤ教法廷長官および次席ラビを務め、建国後は帰国し、ラビ法廷の判事に就いた後、1968年にテル・アヴィヴ首席ラビに就任して、1973年から約10年にわたりスファラディー首席ラビおよび最高ラビ法廷長官を務め、イスラエル宗教行政のトップとなった。

ラビ・ヨセフが1984年にシャス党の設立に踏み切ったのは、ラビ・シャハの祝福によったものだった。ラビ・シャハの考え方は穏健であり、占領地の放棄さえも訴えた。ラビ・ヨセフはスファラディー系の伝統であるプラグマテックな思考の持ち主だった。すなわち、連立内閣参加の見返りに政府補助金を獲得するという明確な目的があった。再び、ラビ・ヨセフとラビ・シャハの対立が明快になってきた。1992年、ラビ・シャハが「スファラディームは宗教や国家の扱うにはまだ十分ではない。成長はしてはいるが、まだまだ学ぶべきことが多くある」というスファラディーム（つまり、ミズラヒーム）を侮蔑するかのような発言を公的な場所で行なった。この発言に対してミズラヒームから激しい抗議の声があがった。ラビ・ヨセフはラビ・シャハと絶縁し、事実上、シャス党における精神的な権威

となった。

シャス党設立以来、現場の政治指導者として活躍していたのが、アリエ・デリ(Arye Deri)であった。デリは1959年にモロッコで生まれ、1968年に家族とともにイスラエルに移民してきた。デリー家はテル・アヴィヴの南に位置する「開発都市」の一つ、バト・ヤムに定住した。デリの両親は息子が非行に走るのを恐れて、ラビ・シャハの主宰するイエシヴァーに入れてユダヤ教教育を受けさせた。1984年の第11期クネセト選挙にシャス党は選挙リストとして登録し、4議席を獲得し、老舗の宗教政党アグダトと国家宗教党と肩を並べた。

それ以来、シャス党のクネセトにおける議席数の伸張ぶりは飛躍的であった(括弧内は得票概数と得票率)。すなわち、1984年の選挙では4議席(63,600票、3.1%)、1988年には6議席(107,000票、4.7%)、1992年には6議席(130,000票、4.9%)、1996年には10議席(260,000票、8.7%)、1999年には17議席(430,676票、14%)という数字が示すように、15年間で議席数は約4倍、獲得票は6.7倍に伸びた。

シャス党の伸張とともに、デリも出世コースを駆け上った。すなわち、シャス党最初の内務大臣となったイツハク・ペレツ(Yithak Peretz)の上級顧問に抜擢され、さらに内務省局長、そして1988年、29歳の若さで内務大臣に就任、1993年までリクード政権と労働党政権の両方の内相を務めた。

#### 4. メレツ

1992年のクネセト選挙に際して、ラッツ(市民権選挙リスト)、マパム(統一労働者党)、シヌイ(ヘブライ語で「変化」の意味)の三つの政治組織が統一して形成された選挙リスト。メレツという名称はこの三つの政党の頭文字をマパム、ラッツ、そしてシヌイの順に並べたもの。ラッツは1973年に市民運動を母体に結成された。マパムはイスラエル建国前から存在するマルクス主義的なシオニスト左派で、ハ・ショメール・ハ・ツァイール(若き防人)に起源をもち、イスラエル建国前からユダヤ人とアラブ人の共存を唱えてきた。シヌイは中道政党と自ら規定する世俗主義の徹底を唱える。結成当時の党首シュラミート・アローニーは世俗主義を掲げるとともに、異なる信徒間の結婚を認めないイスラエルの婚姻制度の改革を唱えていたために、宗教政党と衝突してきた。現在の党首ヨッシー・サリードである。

#### 5. マフダル(国家宗教党)

1956年、ミズラヒー運動とハ・ポエール・ハ・ミズラヒーが合同して結成された宗教政

党。建国以来、連立内閣に加わってきたために、イスラエルにおけるユダヤ教に関わる法制はマフダルの主導で法令化されてきた経緯がある。イデオロギー的にはシオニズムをメシア論で説明する宗教シオニズムの立場をとる。すなわち、1917年のバルフォア宣言、1948年のイスラエル建国、1967年の「嘆きの壁（西の壁）」解放など、一連のシオニズムの歴史的達成をメシア到来へのプロセスと捉える。したがって、ヨルダン川西岸・ガザへのユダヤ人入植をもメシア到来のための努力と解釈するために、これまでも大イスラエル主義を主張してきた上に、より過激な政党を生み出してきた。クネセトには常に議席を確保しているが（ 期13、 期12、 期12、 期11、 期12、 期10、 期12（1977年） 期6、 XI期4、 XII期5、 XIII期6、 XIV期9、 XV期） 1980年代に入ると、マフダルよりも右翼的な政党が同党から分離して結成されたために次第にクネセトでの議席を減らしていったが、1990年代以降再びその党勢を盛り返しつつある。

#### 6．統一トーラー・ユダヤ教党

統一トーラー・ユダヤ教党（Yahadut ha-Tora ha-Meuhedet）は1992年の第13期クネセトにおいて、アシュケナジー（ドイツ系ユダヤ人）系ウルトラ・オーソドックス（超党派派ユダヤ教徒）宗教政党の老舗アグダト・イスラエル、ポアレイ・アグダト・イスラエル、デゲル・ハ・トーラー、そしてラビ・イツハク・ペレツとともに単一リストを形成して、結党した。しかし、当初はわずか3議席のみ獲得したのみであった。歴史的に見ると、アグダト・イスラエルは1955年の第3期、1959年の第4期、1973年の第8期のクネセトでは、ポアレイ・アグダト・イスラエル（アグダト世界連盟から分離・独立して結成）と同一の選挙リストとしてクネセト選挙に出馬した。1988年の第12期クネセト選挙ではエリエゼル・シャハ率いるリトアニア派がアグダトから離れて新たにシャス党を結党したために、シャス党の離脱に対応して改めて「デゲル・ハ・トーラー（トーラーの旗：Degel ha-Tora）」が新しく結成された。